

《追書——人類の任事に携わっていない男
はことごとく無視抹殺してしまいなさい》

————— M^{me} R.F.

*

わたしの書いたもののうちで印刷に付されたのは、ほんの教えるほどだが、これは決して、わたしが活字嫌いであるため、ではない。いやむしろ、奥のところは、その正反対ですらある——わたしほど無類の活字好きも、とうとう見付からないのではないだろうか。本当は、一刻も早く公表したくて、うずうずしているのだ。その無頓着な外見は、ただ、活字という外形よりもそれにふさわしいかき内実に、いまのところ専ら心を奪われている、という理由による。これは、もの書きの格差よりも、はるかによく戦略上の配慮を、反映しているもののようだ。

まことに活字は、強丸である！——それは、人々の頭蓋を貫き、時代を打破き、その挺力の尽きぬ限り、いかに遠隔へも到達できる。活字はわいわいかき手にするのできる、唯一最大の武器である。目下のわたしは、それを磨きあげ、なるべく大量の火薬を充填しようと、躍起になっている、という日常である。ピストルよりライフル、機関銃より野戦砲のほうが、いいに決まっているのだから。

『記号空間論』を、なんとしても、遠からぬうちに書物として完成させたい。もちろんわたしは、これとびきり重要な仕事と考えている。この作業を始めてから、足かけ3年になるが、これまでわたしが書いてきているのは、ひとつのこらず、"記号空間論"というプランのための草稿である。草稿というからには、パンパン草の如くあちらこちらに生えそめただけのもので、馬にでも喰われてしまうかもしれないし、ちょっと陽に当たれば萎れ、風でも吹けばとんで

跡かたもなくなる態のものである。それに対して、書物としての『記号空間論』のためには、別に、もっとずっと堅牢なテキストを、用意しなければならぬ。それが、原稿である。原稿は、草稿をさらに煮つめるようにして作る（はずの）もので、全体として、一冊の本として出版可能な分量——たとえば、四百字詰にして500枚程度——のものでなければならぬ。そしてもちろん、適切な目次構成をなしたものである必要がある。心づもりとしては、一日も早く、願わくは年内、遅くともおうにかこの年度内に、原稿をいちおうの形にまでして、そのあとはその赤入れ・推敲をくりかえす、というようなかたちにも、ていまたい。（ある程度外圍から形をつくっていかないと、草稿のつみがさゆにまかせていたのでは、埒があかない部々もある）

『記号空間論』の構成や目次については、1977年春、「性別論（予稿）」と粗前後して、一度その概要を示したことがあったが、それ以来徐々に変化しつつある腹案を表明したことはなかったので、この機会にその一案を、写真に示してみよう。もちろんこれで行くと決めたわけではなく、ただ折々の作業見取のひとつである。

ひと目みて誰しもそう思うだろうように、これはほとんどありそうにない書物である。しかし、書かぬことは信じられないようなテキストこそ、書くに値するのは、たしかなことだ。この仕事のプランは、わたしを言い様もなくスリリソクな気分させる。何と云っても、生身の学直よりも活字の方がはるかにリアルな存在である。たぶん、このことに学直は十分気がつくべきなのである。学直はたちまちにして、へたばったり、くたばったりしてしまうだろう。だが書物のほうは、そうでない。よりリアルであるとは、存在者としてより広大な時間的・空間的な広がりを獲得する、ということである。書物のまを、息をついたり飯を喰ったりしている生命体である間は、学直は無であるのだ。学直の世界を構成するのは、活字（書字表現）であり、それが全てである。（それはちょうど、一個の生活者の前では、学直の世界など、全くの無でしかないのと、さながら反対である。）学直としてあるということとは、生命を活字へと変換する反応器だ、ということだ、決して、その逆ではなくて。

けっこうよたよたしながらも、これまで向とかやってきたのは、こうした自己流の書物の理念にひきずられてということらしい。この作業を続けるには、

「性別論」「性別論……文献」その他……(中略)…… どうも有難うございました。

……(中略)……

心的性差に関しては、十分な証拠をあげてそれを説明することはとても難し
いように思われます。それは、人が生物学的に生きているというよりは社会的
に生かされており、「幻想」的に生きているからであり、心的性差をその自体
で抽出するには、人が生まれ落ちた後に圧倒的に賦与され関わりを惹かれる
社会的な規定因の前で、生物学的根拠に基づく心的性差というものは、規定因
としてはほとんど意味となさない程に拡散し或るいは無化されるためだと思わ
れます。それともうひとつ、「女は女らしく、男は男らしく」といった類の発
言が絶えることなくいくらでもいまだに(そして今後も 当分)飛びかうことが
でき蔓延ることのできる私達の状況の裡で、心的性差がある、と述べることは
結果的にそのらの発言の立場に加担してしまうことになる公算があまりに強い、
ということがあります。けれども心的性差は、一般に言われる「女らしさ」「男
らしさ」等とは本来全く関係のない、未分化な或る種の心的な差のようなもの
(「違い」というよりは)で、その自体ではそれ以上でもそれ以下でもない(従
って、「能力」の差などを意味しないし、「気質」を形成するには拡散しすぎ
ている)ものとして、しかも、全く存在しないとするともちがいはあるような
ものとして、想定しうるのではないかと思います。私には「女は非論理的……云(3)

わたしの性別論考への幾分の異和をこめて、荒尾氏が呈示する論述のすじみ
ちが、ひとつこと、すなわち心的性差の有無に向けられているのは、一語明らか
なところであろう。たしかに心的性差の概念は、わたしの性別論考の、ひと
つの焦点をなしている。わたしはそこで、心的性差は存在しないという仮説を
掲げ、それを根拠に、現行の社会的性別(観)を批判的に相対化することも、試
みたのであった。荒尾氏の指摘にある通り、この仕方が、「《十分な証拠をあげ
てそれを説明することはとても難しい》(220f)のは、たしかなところである。
にもかかわらず、わたしがそこにこだわったのは、それが、「《現行的には(当
分)……戦略的にも正しいだろう》」と考えたのもさることながら、心的性差を、
何かよからぬもの、忌まわしいものとして、遠ざけたかったからに、ほかなら
ない。心的性差の実在をみとめると、(たまさか男性である)自分の思考の正

々」といったクツは、心的性差があると一般に思われているためにまかり
通ってしまう、というよりも(そんな事はホントーは誰だってよくわからな
いに違ひない)、それを非論理的なものよりクツをヒツヨーとし、そ
して受けいれる他人から社会に至る根深い状況が問題なのだと思われているので
す。そしてその悪しき根深き状況こそが、様々な方向からの社会変革の対象(如
きである)のだから、「『かりに心的性差の存在がたしかめられたとするなら……
まかり通ることになる。』(「性別論」(予稿)P15)というようなことはなく、
従って、心的性差が存在するということが確かめられ、けれども「女は非論理
的……云々」といった非クツはまかり通らない、という状況はありうる、
と考えます。つまり、心的性差のあるなし、と社会的偏見は必ずしも結びつ
かない、と思う次第です。ただ、心的性差はない、とすることは現行的には
(当分)正しいと思われ、戦略的にも有効な正しいだろうと思えます。(ある
ものに対してはできるだけ疑うにこしたことはない、のだから)……(後略
)。【荒尾信子氏の攝爪宛私信(1979-4-26付)より】

当性が、どこかで決定的にそこなわれてしまうような気分したのである。とこ
ろが、荒尾氏の文章は、心的性差の概念にとびきり豊かなイメージを盛りこむ
こともできることを、わたしに気付かせてくれた。その場合の心的性差とは、
何かを二はかとなし心的同一性の(身体的な)根拠のようなもの、とても思
いもの、なのである。いづれにせよ外して居られないポイントは、「《心的性差のあ
るなしと社会的偏見は必ずしも結びつかない》(245f.)」ということ(だけ)なの
だから、ここはすっかり譲って、荒尾氏の文脈にじっくり呑みこまされてしま
っても、むしろさしつかえないような気も、してくる。(つまり、ここからさき
は、性別論として明確に言いうることの領域に、属さないらしい。)

わたしの性別論考に対しては、他の主題のものの場合にくらべて、とくに活
発な反応が寄せられてくるようである。思うにそのわけは、わたしの文章の出
来不出来ということと(おそらく)無縁で、ただこの題材が、ちょうどいまど
き、誰にせよ胸をつかれる思いで考えさせられることの多いテーマだった、と

いうことではないだろうか？ しかし、書き手であるわたしの側の関心は、どうやらそれと少しずれていて、主として理論的なところに絞られている。わたしは、ちかごろの潮流に皮肉もなく細子を合わせて、段階にもフェミニストぶうの言辭を適当におりませているから、その契はきりめは旧弊な抜きがたい固定観念を心直に潜めていることを、ひとはあるいは見逃しているのかもしいない。たとえばわたしは、つぎのような文章に、とても心酔してしまうたかなのだ：

《 さてロックアウトされた男の部屋には決して近寄ってはなりません どうしても扉のそばに来てしまったときは 扉をノックして大きな声でゾファーのよう歌うのです それから名乗るのは自由です それで用が済むときはただちに引き上げなさい

----- (中略) -----

あなたが持っているものものがあるあなたの心を軟弱にするものか否かを見極める力を持ちなさい 女の書いたものを読むことによる益は向もありません ----- (中略) ----- 男はあなたにとって言語です 男を読めるようになるための教養を身につけなさい

親兄弟よりも男を愛する女となりなさい “それとこれとは別ですよ” というのはあなたが男を侮蔑、いや軽視していることの弁解にすぎません あなたにものを教えてくれたのは男であることを常に思い浮かべなさい

---- (中略) ----- あなたの視野を広げてくれたのは男なのです

----- (中略) -----

目に見えるもの一つ一つすべて男から与えられたものです 常に感謝することを忘れてはなりません 男はものすべてを所有しその権利を司ります 常に之の進行方法に耳を傾けなさい 決して質問するような非礼をしてはなりません ただ黙って耳を傾けなさい 約束ごとの行き違いは起さぬよう 間違っても“私には何も言ってくれない どうも信用できない” なんていう文句は口にせぬよう 男に比べたら自分は全く無能であることをいつも確かめることです》

(念のために申しそえるなら、この文章は、女性の手によって書かれたものである。)

この文章にそれ相応の迫力がみとめられるとすれば、それは、性差別の愚昧とはまるで無関係なところからやってきている。そして何より見所ってはないことだが、男といひまた女といつても、ここでは、任意の雄きかかならずかくしているある普遍的な向ものかの喩之でしかない。しかし、(よくともわたしの場合) そのような男/女という隠喩のかたちがきりめく有効でありうるということは、多分に危険な徴候を示していると思われたいことはない。そうした傾向を野放図に認めることがいやだと、心的性差を否定してみせる、という意味あひも、ひきめられていたにちがいないからう。つまり、わたしは 現にわたしが男性として自己定位しているという事実性を相対化するために(だけ) フェミニズムを必辱としているにすぎないではないか。

だいたいわたしは、まっと根がファニストなのだ。(中学のときには、匿名シを抜いて『わが闘争』を3冊買ひ揃え、友人と「ファニズム研究会」を組織したりしては、“オイ、ファニズメ”と、嗤われていた——もっとも、アーリア民族がなぜ優秀なわけはならないのかは、サッパリ理解できなかったが。それより前に、ワグナーを聴いていっぺんにいかれた前科もある。) そうしたわが身に染みついた性質が、そうやすやすとぬけおちるほかがない。幼いからたいそう病気がちだったせいもあってか、わたしは忍耐ということならいくらかしてはいるつもりだけれども、待つとか忍耐するとかいうことと、寛容ということとは、元来まったく別のことである。実際のわたしは、自分で嫌になるほど狭量であつて、なにごとかを許すとか、怒るべきところを妥協点を見出すとかいうことぐらひ、苦手なことはない。性別の問題についても同様で、性別の現状がまことに許すべからざるものとうつるやいなや、その念遣は、あつうことがその性別のもとに生きる具体的なすべての男女に及んでしまい、たんに性別によつて社会規範のありようがケシカラヌのではなく、そのような現行の性別のもとに自己定位していることがなにもケシカラヌというふうには、あまりにもあつさり飛躍してしまうのである。ファニズムの本性が、身体に対する思考の暴虐にあるのだとすれば、わたしの場合その徴候はあまりにも顕著なものがあると判断されよう。ある人の評言によると、わたしはモノマニアのそれこそ標本のようなものであるらしい。そうした過激派的な、穿っけいモラリヌムのあることを、わたしはあつと、時代や状況の悪いせいだと言ひのがれる

ことぶつないできた。荒尾さんの議論が率直である分だけわたしがたいがかりを
をとったのは たぶん わたしの居かのこうしたインチキなところに、
改めて面と向かわせられたせいだと思う。

ねがわくは、皆様には、この救いがたいまでにひねくいてくりかえしたわ
たしを、巧みに善導して下さいませう。

** **

今回あらたにコピーできる状態になったものは、つぎの通りである：

- CN 1 「演劇的人類学」(『地下演劇』4:485-465。(1971年10月
地下演劇社発行) B4×11 ¥100.-)
- CN 79 「生命科学与女性の権利」(B4×13 ¥80.- 二の稿はそ
のまま『女性の社会問題研究会報告』3(近刊)に載る予定。)
- CN 80 「「パンパンジーは語る」か」(手稿版 B4×5 ¥30.-。
なお、『止揚』31(近刊)に掲載の予定。)
- CN 81 「記号空間=社会」(B4×29 ¥145.-)

これらの内容について、ひと通り解説しよう。

CN1は、1971年5月～6月の1ヶ月間をかけて書いた。わたしの実質上の如
女論文にあたる。もとの雑誌の持ちあわせもほぼ、底をついたので、あらたに
XERO-NEGA を撮ってコピーをとれるようにした。いわば複製版。事件の犯人
が犯行現場にたちもどるといわれているように、わたしもどうやらくりかえし
この文章にたちもどっているにすぎないような気がしてくる。そして、この文
章の密度と凝集力をこえることか結局できないのではなかるうかと、内心ひそ
かに危惧を覚えている。趣希望があればコピーをおとすので、そのむき
はお申し出願がたい。

近日発表

女性の社会問題研究会報告

第3集(1979) 予価300円

所載論文 送料120円

「生命科学与女性の権利」

近日発表

止揚

第31号

予価300円
送料120円

所載論文

「「パンパンジーは語る」か」

CN79は、昨年の「性別のありか」につづいて、女性の社会問題研究会の年
次報告に寄稿したもの。ここでは、羊水チェック、早産生み分け法、精子銀行、
体外発生など、今後予想される生命科学・技術の進展がわかれわれにもたらす
困難について、一瞥することを試みた。21世紀を規定づける科学・技術上の革
新は、たぶん3つあるだろう、と思われる。之れらとは、①エネルギー革命、
とりわけ核融合体系の成立であり、②情報工学の進展、とりわけ新世代の超コ
ミュニタ(人工知能)の普及であり、③生命工学の進展、とりわけ生命合成
と遺伝子操作の普及であるだろう。これらのイムパクトを計測しておくのはわ
かれわれの世代の大切な任務だが、今回のペーパーはその一環として位置づけら
れる。

CN80は、雑誌『止揚』を主宰する三島康男氏の要望で、リンデンの著書、
『パンパンジーは語るか』(紀伊國屋書店)の書評を試みたもの。わたしは、
必ずしもリンデンにこだわることなく、ゆながらめ類書を参照し、問題点の輪
郭を描きだすことはふまたと思う。なお、『止揚』31号には、三島氏の「観念
発生試論Ⅲ(その2)」も所載されるはずである。30号に前半を發表したわた
しの「〈言語〉派行島論の基本構図」の後半は、順延して、32号に掲載の予定で
ある。

CN79, CN80は、営業政策上の都合もあるゆえ、せひとも雑誌の埋物をみ懸
めいただけるよう、おねがいしたい。(わたしが稿料を貰っているとか、部数
の多い総合雑誌とかあるなら、決してこういうことは言いたくないけれど、
こちら身銭を切っているのだから、堪忍してください。)

CN81は、『記号空間論』の序章のためにまとめたもので、さきの目次では
§2, §3に相当する。はじめの予定では、§4の關身体的作用力も扱うつもり
であつたけれども、長くなりすぎるため、切りはなして別稿とした。これも早
い機会にまとめるつもりである。

そのほか、書きかけでまとめを二つこいたり、予告したままになっている
ものが多い。こいらを、片端からかたづけたいものである。

HASHIZUME, Daisaburo : 5-9-11 Zaimokuza Kamakura 248 JAPAN

0467-22-1030 YOKOHAMA 51782 CN 82 ¥25.-/ 10 pages